

---

# 図書館通信 — 81 —

---

1987. 10

---

## 亭主敬白

附属図書館長 森口治生

私こと駿遠豆三国を通じて最大の貸本屋のやとわれマスターを仰せつけられました。有能な専門の職員が大ぜいいる所でございますから、やとわれマスター如きに何かが出来るとは存じておりませんが、一同によろしく御ひいきの程お願い申し上げます。

ただ今の所、よその大学でも大同小異かとは存じますが、「この本を」と思った時、大きな割にはそれがないことが多いという学生さんの不満をよく承ります。これ大学直営の貸本屋の特色でございまして、蔵書数を見ましてもごもっともとうなずける次第でございます。地方では大きいとは申せ、私共の蔵書数は県立、市立の一般市民向けの同業者の2、3倍にしか当たりません。その多くは、我こそはこの道の専門家なりとおっしゃる先生方の研究用に購入されたものでございますから、特定の分野については内外に亘るある程度のコレクションにはなっても、新刊のベストセラーや大衆小説はさっぱりということになります。何しろ親方日の丸でございますし、サービスの対象が一般市民とは違うというのが私共の長い間のホコリでございますから。(本屋にホコリはかかせないつきものでございます。)

とは申しますものの、今の幼稚園同様国立大学も学生集めに苦勞する時代が近くやってくるかも知れません。私立幼稚園が園児にサービスするように国立大学も学生さん向けのサービスに努めなければならなくなるかも知れません。それでなくても研究者自体、知識・ノート・カードの世代から情報・ワープロ・フロッピーの世代に移って参ります。貸本屋のサービスも紙・活字からテープ・端末器そして私には予想つけにくい21世紀の機器・メディアへとひろがることでしょう。ここしばらくの間は色々な面で新しいサービスのあり方を模索し続ける時代となろうかと存じます。

保守的なお役所として定評のある文部省までが、それを取ってしまったら、貸本屋でなくなってしまうような閲覧課という名前まで変えてしまおうという時代になってしまいました。一方ではこの変化に対応し、他方ではしばらくはあまり変りそうもない貸本業も続けなければならない大型の貸本屋には(やとわれマスターは別として) これからもイロイロあることでございましょう。

このやとわれマスターは、いささか古すぎると存じます。何しろ重厚な上野の建物で、立派に製本されて旧字体の帝国図書館という金文字の入った岩波文庫を10分程待って名前を呼ばれて貸して頂いて「ホントの図書館とはこんなものか」と感心したり、東京宝塚劇場(アーニー・パイル劇場)のそばの喫茶店か何かが変身したCIEライブラリーで新刊の書物が開架式で並んでいるのを見て「これでも図書館か」と感心したりした世代でございますから。(余談ですが、CIEでは御多間に洩れず切り取り被害がたくさん出たそうで、中でも自然科学とファッション雑誌が最も多いと新聞で見ました。——コピー機はありませんでした。)

しかし、私以外の職員は皆よく勉強しています。

新しい仕事をこなして、新しいサービスも次々と提供出来ようかと存じますが、やはり私共ではどうにも力及ばぬ面も多々あるかと存じますので、皆様どうか寛容と、それに色々とおちえをお貸し下さるようお願い申し上げます。

## 図書館ネットワークと本学図書館の課題

整理課長 杉尾勝茂

2494。これは昨年度における本学の図書館から他の大学図書館・研究機関へ文献の取得を依頼した件(冊)数である。この数は学部数で本学と同一レベルにある大学図書館と比べてはるかに上まわり、全国国立大学図書館の平均をも上まわっている。もちろん本学図書館に所蔵する文献の利用を受けつけた件数も多くあります。学術情報ネットワークがすすむほどに、また今日の学術情報量の増大という状況のなかで、ますます文献の相互利用は増加することは明らかなことである。

今日の学術情報は、社会的要因から自然科学・社会科学の分野において、従来の学問体系分野と異なる、学際的研究の進展にともない学術情報の多様化と量の増大をもたらしている。もはや一館の所蔵で情報要求をみたくすることは不可能になってきていることは自明のことである。また技術的要因としてコンピュータによる情報活動が、すでに商業ベースで提供されている今日では、情報の諸検索の結果から、文献の所在情報と提供サービスについての要請は当然の帰結でしょうし、さきにふれた文献の相互利用の増加という状況のなかで所在情報の整備が急務となっている。

文献の所在情報を提供する機関の一つとして大学図書館の果たす役割は大きい。社会的・技術的要因から学術文献の増大・情報活動の飛躍的な発展のなかで、本学図書館は電算機の導入をみた。電算機の導入は学術情報システムへの参入と図書館ネットワークの一員として機能することであり、従来の伝統的な図書館業務から新たな転換を迎えることとなります。前館長は前号で、本学図書館の電算化業務は学術情報ネットワークに参入する第二期に移行することとして位置づけられています。この第二期の課題は、学術情報システム

の中枢である学術情報センターの目録システムの運用と本学に保有する情報資源を全国的な目録所在情報データベースに組み込み、大学図書館が共同で作成する全国総合目録形成の一端を担うことにある。と同時に、学術情報センター目録システムに整合する本学図書館のシステム化にある。

図書館業務のシステム化の視点は、新たな転換を迎えた図書館環境のなかで、図書館資料情報の効率的な利用と図書館業務の省力化にある。行政改革の進行のなかで、定員削減は予想しがたい数になるといわれている状況に加えて、研究領域の広域化により生みだされる学術文献は、図書館的整理技術においても複雑化をきわめている。資料分析に時間を要しそれだけ利用者に対する学術文献への接見を遅らせる結果となっている。図書館の情報管理において資料の網羅性・正確性・迅速性の原則を保障するうえで、学術情報センターが提供する日本及び各国の MARC (機械可能目録) 等を利用し、本学図書館における目録業務の反映を可能にするシステム化とともに、従来の図書館業務の思いきった省力化が必要になっています。このことはまた、利用者の側からみると情報取得活動が電算機による情報検索という従来と異なる検索手段の多様化をとともうこともある。図書館のおかれている環境と図書館業務の変革にかかわって、利用者の要望との整合が特別に重要となっている。

現在、館員によるシステム化の検討をすすめているが、その内容も具体的なものとして整理しつつある。全容が整い次第、図書館業務電算化委員の御理解を載せ、本学図書館の学術情報ネットワークへの本格的参入に御協力、御理解を願うものである。

### 図書館利用票



0123456789

人文学部

安部利己

静岡大学附属図書館

### もう受取りましたか……

あなたの図書館利用票が、できています。図書館のカウンターに学生証を提示してください。その場で、すぐに発行します。

〈私のすすめたい本・55〉

## 安西徹雄著 『英語の発想—翻訳の現場から』

木村宣美

英語を読んでいると、無生物を主語にした英文によく出くわす。ところが、日本語の場合にはどうかといえば、欧文直訳調の日本語を除けば、無生物を主語とする表現法はないと言ってよい。したがって、欧文直訳調の日本語に出会うと、どことなくぎこちなさを感じる。この無生物主語の構文が、日本語と英語の文章構成法の違いを示す一例と言うことができる。

本書は、日本語としてできるだけ自然な表現を求めて訳文を練るといふ実地の作業を通じて、どのようにすれば、英文を日本語らしい訳文に転換することができるかを追求した翻訳読本である。英文の具体的な例をあげ日本語らしい翻訳に少しでも近づこうとする過程は、とても有益で教えられるところが多い。

安西氏があげている日本語と英語の文章構成法の違いには次のようなものがある。

- (1) a. 英語では名詞で書いてあっても、日本語ではこれを動詞に読みほだいてやったほうが、自然な訳文を得やすい。
- b. 英語では〈もの〉を主語にした構文になっても、日本語では人間を主体にした表現に変えたほうがついて行きやすい。
- c. 英語では、重要な情報は文章の前のほうにくるのにたいして、日本語ではむしろ、力点は文末にくる傾向がある。
- d. 日本語では、主語の働きは動詞によって果たされる面が多い。だから、わざわざ主語を表に出す必要のない場合が少なくない。
- e. 日本語は一般に直接話法が得意である。ところが英語は、むしろ間接話法を得意とする。
- f. 日本語では、物事全体が自然にそうなったというような表現を好むのにたいして、英語ではこれを人間の「行動」として捉え、「動作主+他動詞+目的語」の形で表現することを好む。

以上 (1a) - (1f) としてまとめられた翻訳上の留意点にしたがい、英文を日本語に訳すことが肝要である。

だが、しかし、本書を薦める理由は、実際の翻訳のプロセスを通じてえられた (1a) - (1f) の翻訳上の留意点が述べられているということだけによる

のではない。むしろ、本書の主眼を「直訳」から「意識」への変換のポイントとして日本語と英語の根本的な発想の転換にしている点にある。つまり、日本語と英語とでは、ものの感じ方や認識のパターンにはどのような違いがあるのか、あるいは、ある情況や事態を言語化するプロセスにはどのような違いがあるのかという点が論じられていて、非常に興味深い。

以下、安西氏が指摘する日本語と英語の基本的な発想の違いを紹介する。

- (2) 英語は情況を捉えるのに、〈もの〉に注目して、因果律的に解析し、〈もの〉の〈もの〉への「働きかけ」という動作主性の軸にそって概念化してゆく傾向が強いのにたいして、日本語は情況をまるごと〈こと〉として捉え、「情況埋没型」、その〈こと〉と人間とのかかわり方を、人間の視点に密着して捉える（「主観性・共感性」）傾向が強い。

また、視点を変えて、日本語と英語の表現・発想の違いを次のようにも言うことができる。

- (3) 〈もの〉が〈もの〉にたいして、なんらかの動作を働きかけ、その結果として一つの情況なり出来事なりが成立したという捉え方をするのが英語で、あたかも情況が全体としておのずから成ったという捉え方をするのが日本語である。

(2)と(3)にあげた日本語と英語の認識のパターン・言語化のプロセスの違いをまとめると次のようになる。

- (4) 英語は〈もの〉的であると同時に〈する〉型の捉え方をするのにたいして、日本語は〈こと〉的な捉え方であると同時に〈なる〉型の発想を特徴とする。

このように、日本語と英語には根本的な発想の違いがある。したがって、英文を日本語に訳す際には、以下の点に特に注意する必要がある。

- (5) a. 英語の名詞表現を動詞表現に読みほだく。
- b. 主語は人間を主体にした表現に変える。
- c. 日本語の場合、「待遇表現」によって、誰が誰にむかって誰のことを話しているのかわかるので、必要がないときは主語を省略する。

(5 ページ右下につづく)

## 読書の楽しみ

落水 浩一郎

駅の近くで求めた気に入った文庫本をカバンの中にしまい込み、東京行の各駅停車に乗り込む時の気持ちはなかなかよいものである。

私の読書趣味は、青春時代のある時期、話し、共に歩くことが人生のすべてであった時期を除いて絶えたことがない。

経済的な理由と持ちはこびの手軽さから対象は主に文庫本である。

20代の後半には、6カ月でSF 300冊という乱読も随分おこなったが、最近少し、自身の読書の趣味傾向がわかるようになってきた。

私は、歴史上のことがらや人々についての理解が深まる本が特に好きである。地球という平面の広がりや時間の流れという軸によって形成される立体的な空間、その各点で人々や様々な集団がひきおこした、わずかな拡がりをもつ活動の痕跡。それ等の痕跡をいくつかの文庫本から見つけ、風土、文化、権力組織、その時代の人々の物質的・精神的な飢えの状態等を、文庫本よりは分厚い、そのかわり固苦しくて読みにくい本を辞書がわりに眺めつつ、空間のある部分に関連づけていく。

ある時、大きな空洞を発見すると、その空洞を埋めるための資料を求めて、本屋の棚をすみから順に眺めていく、一時間程の時間が徒労に終ることも多いが、それはそれでまた充実している。

さて、この記事の作成を依頼されたときの標題は「私のすすめる一冊」という題であったが、最近の粗製濫造の御時勢と私の読書の趣味傾向とを考えあわせるととてもできない相談である。人間と同じように完全な本などありえない。またどのような本もそれなりにおもしろい。

最近学会等の用事で旅行することが多く、そのつれづれに読んだ本の中で、二つ程のまとまりを紹介させていただく。

数カ月前、静岡駅の本屋で「濤」綱淵謙錠著という本をその題名にひかれて買った。幸田露伴の実兄、郡司大尉が千島開拓の先兵たらんと欲し、資金不足のため短艇で出発するという無謀な計画を立案、実行し、いつの時代にもそうであるがマスコミがただ紙面を華やかにかざるためにのみ英雄あつかいし、寄港先の海岸ではじめはあたたかくのちには土地の権力者の名誉心をみたすために

のみ歓迎をうけつづける内、ついに無謀とはいえ一つの志が挫折するという内容である。この本はそれなりに楽しんだが、その解説中に南極探検で有名な白瀬中尉が後に彼の協力者となり、対立し、自身の怨念を南極探検という目的に昇化？していくいきさつを書いた「極」という本があることを知った。この本はまだ見つけていない。それと同時に千島・樺太・北海道の開拓時代に関わった人々への関心の伏線が私の中にはられた。しばらくして「間宮林蔵」吉村昭著を本屋で見つけた。小説としてもなかなかおもしろかったが、間宮林蔵が伊能忠敬と測量術（量程車という箱車・藤縄・鉄鎖・足）を通じて師弟関係にあったこと。幕府がその当時大人数を北方に配置しその多くは水腫病で死に一冬を越せなかったこと。アイヌの人々が口にするものを食して彼が助かったこと等の話を特に楽しんだ。

このように小説を楽しみつつ読捨てていく過程で突然私の読書が組織的になることがある。例えば今回のきっかけは、間宮林蔵が苦労して（読む方にとっては血沸き肉おどる場面ではあるが）樺太の西海岸を北上し間宮海峡を見つけた後、国禁をおかして対岸に渡りアムール河を經由して清国領東韃靼に渡る部分を読んだときである。「この時期に清国の影響下にある地域がいつどのようにしてロシアの勢力下にうつったのか」「その土地にはもともとどのような人々が生活し続けているのか」。高校時代の断片的、丸暗記の知識を懐しく思い出しつつ、しばらくの間は女真族・金朝・満州族の歴史等をしらべつつ「ソ連膨張地図の読み方」恵谷治（主張は必ずしも納得できないが本中の資料や地図が有用であった。）「満州帝国」児島襄著等、関連するものはかたっぱしから読み漁ることになる。いつも最後にはその土地に出かけ、空気と水と山の色を確め、作物と人家の様子を眺めなければという結論になる。

さて、数年前に妻がクリスチャンになった。それをきっかけとして大河ドラマ風の小説以外に人間の心の歴史を理解できる本を読むようになった。

私の祖父は僧侶である。そのようなわけで御経は子供のころ正座して叩きこまれ今でも暗誦できる。学生時代には東大出版会の各経典の文語訳も

読んだ。しかしそのころは知識を得るために読んだ。妻の入信をきっかけにして、人間の心の歴史を理解することに努めている。その必要を感じて、「聖書」はなかなか読み切れない。そこで「旧約聖書入門」「新約聖書入門」三浦綾子著、「文明への問い」梅原猛著等のやさしい本を手がかりにして少しずつ努めている。前者は若干情緒的ではあるが、罪に対する救いの予言、十字架による救いの実践の意味が理解できた。後者は繰返しが多く読みづらいが、ギリシア文明（理性）を父とし、キリスト教を母とする西洋文明の過去の流れ、デ

カルトによる思惟するわれの独立、その結果としておこる人間の欲望の開放と物質万能時代の到来という筋道は興味深く読んだ。工学の世界には知性がない。理学の世界には知的楽しみは満ちあふれるが、その目的がよくつかめない。しかし技術なしには現代人は生活できない。

後半になりなかなか筆が進まない。書評という形で議論すべき問題ではないからである。しかし、本を通じて時間・空間に関係なく人間が互いに触れあうことこそ読書の楽しみであると思ひ書かせて載いた。  
〈工学部・情報知識工学〉

〈参考調査係〉より

## 雑誌の利用について

最近、運用係のカウンターから、何年分もの、山のような雑誌をはこび出す利用者を、少なからず見かけます。図書館の資料を利用する、という点では、大いに結構なことで、ドシドシそうして頂いて良いのですが、多くの場合、目次をくるだけで、5分もしないうちにカウンターに逆戻り、というのが実情のようです。重たい思いして思いをとげず、という次第。

特定の論文が、ある雑誌のここ数年のうちにあられるらしい、ということならまだしも、たとえば、マーラーのことが載っているかも知れないから、ある音楽関係の雑誌をくってみよう、というのなら、それはまったく〈非科学的〉ですし、徒労というしかありません。

「雑誌記事索引」なるものがあります。1冊だけをひけば、5年間のあいだに数百種の雑誌に掲載されたマーラーに関する論文が、すべて解るのです。その1冊というのは、人文・社会編の累積版で、「超伝導」だったら科学技術編が、「エイズ」だったら医学・薬学編があります。また、同じようなものが、もっと狭い分野ごと、たとえば、経済学、あるいは、日本文学とあります。

それらは、参考調査係の前方、一番窓側の書棚にならんでいます。ひまをみつけて眺めてみてください。思わぬ発見があると思います。

ある雑誌の、数年分の内容を知りたい、という時も、山のような現物を持ち出すまでもありません。主要な雑誌では、数年分をまとめた、場合によっては創刊号からの記事索引があります。単行本になっている時もありますが（前記の場所にあります）、多くの場合は、その雑誌の特定の号に掲

載されていますので、なかなか目につかないのですが、見つけ出す方法はあります。

まず、国会図書館の和雑誌目録です。掲載号の一覧がのっています。そこに目的のものが無い時は、「雑誌総目次索引集覧」あるいは「日本雑誌総目次要覧」を見てください。学術雑誌、といわれているものに関しては、ほとんどカバーできるはずですが。

そうした便利なものが無い時でも、月刊誌だったらその年の最終号に、週刊誌の場合は四半期ごとの最後の号に、目次をまとめたものが載っていることが多いのです。月刊誌を10年分調べるとしたら、120冊が10冊ですむわけです。

それも無い時は——やはり、山のような現物に對峙（たいじ）するしかありません。しかし、通常、一般の人がひとつの雑誌を10年分も20年分もとっておくことは少ないわけで、100冊あるいは200冊とならんだ雑誌を通読するのは図書館ならではのこと——ともあれ、機能的に、そしてなにより、大いに図書館の雑誌を利用していただきたいと思います。

（3ページから）

- d. 英語で間接話法で書かれている場合、直接話法に転換する。
- e. 英語の関係代名詞は、「…こと」ないしは「…の」をつけ、全体を体言相当の句にまとめて訳す。

本書は、対照言語学的・言語文化論的観点から、日本語と英語の表現・発想の違いを追求した翻訳読本で、一読に価する。（講談社・新書判 221頁・420円）  
〈教養部・英語〉

# 昭和61年度図書館統計

## ■利用統計

### (1) 貸出・閲覧

#### 本館(学部別)

	学生数	閲覧		貸出		
		庫内図書雑誌	開架	庫内	計	
学部	人文前期	782	271	3,841	126	3,967
	人文後期	754	5,434	8,285	2,072	10,357
	教育前期	1,028	864	3,609	318	3,927
	教育後期	1,037	3,382	9,166	1,400	10,566
	理前期	408	124	2,889	37	2,926
	理後期	378	422	5,389	89	5,478
	農前期	313	33	957	40	997
	農後期	307	47	1,200	14	1,214
	工前期	1,019	78	1,981	39	2,020
	計	6,026	10,655	37,317	4,135	41,452
	教養部(前期)	3,550	1,370	13,277	560	13,837
	大学院	理	51	256	291	62
大学院	教育	81	724	970	975	1,945
大学院	農	43	5	39	2	41
大学院	計	175	985	1,300	1,039	2,339
専攻科	132	205	709	122	831	
学外者	—	715	—	—	—	
合計	6,333	12,560	39,326	5,296	44,622	

注) 学生数・教職員数は5月1日現在(法短の学生は除く)

#### 本館(貸出・教職員学部別)

	教官数	個人			研究室備付等	合計
		開架	庫内	計		
人文	75	103	1,842	1,945	776	2,721
教育	133	94	1,502	1,596	565	2,161
理	68	30	77	107	679	786
農	71	26	82	108	803	911
教養	90	97	904	1,001	2,165	3,166
計	437	350	4,407	4,757	4,988	9,745
法短	14	4	141	145	2,295	2,440
名誉教授	—	5	64	69	25	94
事務職員	301	107	185	292	144	436
合計	752	466	4,797	5,263	7,452	12,715

#### 浜松分館(層別貸出)

区分	貸出冊数
学生	5,978
院生等	2,276
教職員	955
合計	9,209

#### 浜松分館(分類別貸出)

(冊数)

0 総記	166	4 自然	3,210	8 語学	22
1 哲学	19	5 工学	5,143	9 文学	75
2 歴史	15	6 産業	3	雑誌	473
3 社会	52	7 芸術	31	合計	9,209

### (2) 文献複写統計

区分	本館			浜松分館			
	人数	件数	枚数	人数	件数	枚数	
依頼	学生	562	572	5,340	540	1,011	7,139
	教職員	1,494	1,649	19,258			
受託	学内	7,430	16,089	79,221	77	120	712
	学外	1,178	1,623	13,042	313	479	3,052

#### 外国への文献複写依頼(本館)

区分	件数	枚(コマ)数
学生	5	22
教職員	115	2,846
合計	120	2,868

#### 相互貸借冊数

区分	本館	浜松分館
貸出	12	0
借用	148	6

### ■増加図書統計

( )内は昭和61年度末の累計

	本館			浜松分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
0 総記	807 (33,193)	120 (8,685)	927 (41,878)	46 (3,457)	0 (800)	46 (4,257)
1 哲学	1,003 (23,193)	498 (13,972)	1,501 (37,165)	23 (2,951)	7 (559)	30 (3,510)
2 歴史	2,315 (43,480)	442 (8,413)	2,757 (51,893)	6 (1,615)	2 (217)	8 (1,832)
3 社会	5,220 (125,870)	2,300 (39,830)	7,520 (165,700)	22 (3,383)	9 (434)	31 (3,817)
4 自然	1,799 (56,849)	2,123 (49,093)	3,922 (105,942)	636 (23,489)	933 (28,210)	1,569 (51,699)
5 工学	858 (21,113)	168 (3,789)	1,026 (24,902)	1,086 (33,136)	682 (20,485)	1,768 (53,621)
6 産業	876 (34,023)	207 (6,886)	1,083 (40,909)	5 (631)	1 (25)	6 (656)
7 芸術	704 (17,768)	87 (2,795)	791 (20,563)	45 (1,749)	0 (272)	45 (2,021)
8 語学	606 (16,786)	382 (11,131)	988 (27,917)	27 (3,030)	5 (2,122)	32 (5,152)
9 文学	1,722 (50,134)	934 (32,272)	2,656 (82,406)	7 (3,621)	0 (823)	7 (4,444)
計	15,910 (422,409)	7,261 (176,866)	23,171 (599,275)	1,903 (77,062)	1,639 (53,947)	3,542 (131,009)